

令和7年度 幼保連携型認定こども園教育・保育要領に基づく自己評価

作成日

令和8年3月26日

法人名

園名

和順会

むさしこども園

まとめ

全体平均

4.20

<p>第2章第2節 乳児期の園児の保育</p>	<p>一人ひとりの生活リズムや家庭環境を尊重したゆったりとした関わりにより、子どもが安心して過ごせる環境を構築できた。担当制保育の意義を再確認し、愛着形成に基づいた「安全基地」としての役割を意識することで、情緒の安定や豊かな語りかけによる言葉の獲得、五感を育む環境構成へと繋げることができている。 今後は、これまで以上に1対1の時間を大切にしながら、個々の気持ちに寄り添った丁寧な応答的保育を実践し、発達を見据えた信頼関係の深化と、家庭との緊密な連携に努めていきたい。</p>
<p>第2章第3節 満1歳以上満3歳未満の園児の保育</p>	<p>一人ひとりの発達の個人差に応じ、養護と教育が一体となった援助を行うことで、保育教諭との深い信頼関係を築いた。生活リズムを整え「自分で」という意欲を支えつつ、友だちとの関わりや言葉でのやり取りを丁寧に仲立ちしたことで、相手の気持ちへの気付きや社会性の芽生えを促せた。 また、自然体験や表現遊びを通じ、探究心や想像力を育む環境構成に努めた。今後は、子どもが主体的に遊び込める工夫を継続するとともに、食育の推進や安全管理の徹底を図り、心身の健康と豊かな感性を育む保育をさらに深化させていきたい。</p>
<p>第2章第4節 満3歳以上の園児の教育及び保育</p>	<p>一人ひとりの多様性に寄り添い、1年かけて丁寧な集団づくりを行った。コーナー遊びや対話を重視したミーティング活動を通じ、自己決定の場や他者の意見に触れる機会を設けたことで、思考力や折り合いをつける力、主体的な表現意欲が育っている。 また、五感を活用した食育や運動遊びを通じ、健康な体づくりと挑戦する心も養われた。 今後は、子どもの「なぜ？」という探究心や感動をより深く遊びや行事へと展開できるよう、保育者の意図的な環境構成を強化したい。共感的な関わりを基盤に、子どもの非認知的な育ちを支える支援の充実を目指す。</p>
<p>第2章第5節 教育及び保育の実践に関わる配慮事項</p>	<p>生命の保持と情緒の安定を基盤に、一人ひとりの発達段階や特性に応じた環境構成に努めた。健康状態の把握やアレルギー対応、安全点検を徹底し、安心・安全な保育環境を維持している。また「自分で」という意欲や自己主張を尊重しつつ、見通しを持った生活の中で主体性を育む関わりを意識した。保護者とは日々の対話や掲示板を通じた情報共有を密に行い、家庭との連携強化を図った。今後は、配慮を必要とする子への専門的な支援の充実や集団保育の質向上に向け、職員間の情報共有と研鑽をさらに深め、個々の多様性を尊重した保育を推進したい。</p>
<p>第3章 健康及び安全</p>	<p>健康状態の早期把握とアレルギー対応、衛生管理を徹底し、一人ひとりが安心して過ごせる環境づくりに努めた。食育では菜園活動やクッキングを通じ、食への興味や感謝の心を育む機会を持たせたが、今後は咀嚼や食事マナーの定着、適切な喫食環境の確保をさらに追求したい。安全面では、不審者対応訓練やリスク予測研修を通じ危機管理意識が高まった一方、ケガや誤食の発生を重く受け止め、動線の再確認や見守り体制の再構築が急務である。今後はマニュアルを形骸化させず、組織的な情報共有と家庭・関係機関との連携を深め、防災・防犯体制のさらなる強化を図る。</p>
<p>第4章 子育ての支援</p>	<p>保護者の自己決定を尊重し、「共育て」のパートナーとして信頼関係の構築に努めた。ドキュメンテーションや公開保育を通じ、家庭との価値観の共有を図っている。また、日々の対話や個別面談では保護者の思いに寄り添い、多角的な視点から安心感を得られる支援を心がけた。今後は、専門職間の連携をさらに深め、専門的な助言や情報提供の質を向上させるとともに、地域の親子が孤立せず楽しく集える場づくりを推進し、園・家庭・地域が一体となった支援体制の充実を目指す。</p>
<p>第5章 職員の資質向上</p>	<p>キャリアアップ研修や人権研修での学びを園内で共有・言語化することで、組織全体の保育の質向上を図っている。また、公開保育での発表や他園視察を経て、自園の実践を客観的に見つめ直す機会を得た。今後は、AIの活用等による業務効率化を進めつつ、学んだ知識を計画や環境構成へ具体的に反映させる実践力を強化したい。職員間の肯定的な対話を基盤に、架け橋期カリキュラムの構築など、小学校接続を見据えた長期的かつ専門的な視点での保育実践を深めていく。</p>
<p>総合</p>	<p>R7年度は、対外的な“保育発表”を積極的に行いました。それを通じ、個々の発達差や生活リズムを尊重した「養護と教育の一体化」を基盤に、子どもが自ら遊びを選択し、探究心を深められる環境構成が全体的に浸透してきました。対話を重視した「ミーティング活動」や「ドキュメンテーション」の活用により、子どもの思考力や保護者との共育ての視点が可視化できました。一部で誤食やケガ等の課題も見られましたが、それを隠さず真摯に受け止め、リスク予測や専門性の更新（研修）へと繋げる組織体制が確立されています。今後はこれまでの対話の文化を軸に、ICT活用による効率化や小学校接続を見据えたカリキュラム構築を通じ、さらなる保育の質向上と安全管理の両立を図ります。</p>

データ表

内容	項目数	平均
「乳児保育」	15	4.80
「3歳未満児保育」	32	4.63
「3歳以上児保育」	53	4.00
「教育保育の配慮事項」	16	4.38
「健康・安全」	29	3.93
「子育ての支援」	18	4.00
「職員の資質向上」	9	3.89
計	172	4.20

データグラフ

